

## 課題研究要旨

# 親が行政に求める離乳食づくりに関する支援内容

外川晴香<sup>1)</sup>\* 荻野大助<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 名寄市立大学保健福祉学部栄養学科 <sup>2)</sup> 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：離乳食づくり 行政支援

## 1. 背景・目的

生後 5～6 ヶ月から始まる離乳食は、形あるものを噛み潰して飲み込むことができるようになる準備の時期であり、離乳食期から幼児食期の食事はその後の食事の基盤となるため重要な意義を持っている。しかし、少子化や核家族化により、育児に慣れていない親や頼る人が近くにいない親等が多く、親にとって離乳食をつくる負担は大きい。行政施設では「授乳・離乳の支援ガイド(2019)」<sup>1)</sup>を基に親への支援を行うが、行政による離乳食づくり支援の満足度合いや、親が求める支援内容の実態を知り考察することは、今後の支援内容を検討するうえで重要であると考えられる。しかし A 市では実態を把握する調査はされていない。そこで本研究では、離乳食期の子を持つ親全員を対象に、離乳食づくりに関する満足度・求める支援内容を調査し、離乳食づくり支援の参考資料とすることを目的とした。

## 2. 方法

### 1) 対象

1 歳 6 ヶ月児健診を受診した子をもつ親

### 2) 期間

2021 年 5 月～9 月(調査進行中)

### 3) 調査方法

無記名自記式の質問紙調査にて実施。健診時に調査の説明・質問紙配布を行い、依頼文書を添付した。後日郵送にて回収し、回収をもって同意を得られたこととした。

### 4) 調査内容

(1) 保健センター配布の離乳食づくりリーフレットの満足度

「とても参考になった」「やや参考になった」「あまり参考にならなかった」の 3 件法

(2) 保健センターに求める離乳食づくりの支援内容

4 ヶ月児健診時、7 ヶ月児健診時それぞれの上位 3 位の「どのような支援があると良かったか」について

### 11 項目

### 5) 分析方法

記述統計

## 3. 結果

### 1) 回答者の状況

対象者数 66 名(子の月齢: 1 歳 6 ヶ月～1 歳 9 ヶ月)、回答数 32 名(48.5%)

### 2) 保健センターの離乳食づくりに関するリーフレットの満足度(n=30)

\*責任著者 E-mail:h.sotokawa@nayoro.ac.jp

「とても参考になった」は12名(40.0%)、「やや参考になった」は12名(40.0%)、合計で24名(80.0%)であった。「あまり参考にならなかった」は6名(20.0%)であった。

### 3) 保健センターに求める支援内容について

4ヶ月健診時は「離乳食の進め方」「離乳食の献立紹介」「離乳食に加えるべき栄養素について」の順に多く、7ヶ月健診時は「離乳食の献立紹介」「離乳食を食べないときの対処法」「離乳食に加えるべき栄養素について」の順に多かった。

## 4. まとめ

保健センター配布のリーフレットは、食材ごとの目安量や与える内容、栄養素などを参考にした親が多い傾向であった。リーフレットはB4用紙両面に各時期の離乳食の特徴や進め方のポイント、食品別の目安量等が簡潔に記載されているため、見やすく、利用しやすかったことが考えられる。また、保健センターという身近な存在である機関でのリーフレットは、信用できると判断し、参考にしたことが推察される。

保健センターに求める離乳食づくりの支援内容は「離乳食の進め方」「離乳食の献立紹介」「離乳食に加えるべき栄養素」「離乳食を食べないときの対処法」が多かった。4ヶ月児健診時は離乳食の準備を考える時期であるため、離乳食づくりに不安を持っている親が多いことが考えられる。7ヶ月児健診時は遊び食べなどが始まる時期でもあり、離乳食を調理したのにも関わらず子が食べなかったときの親のストレスは大きいものと推察される。離乳食が進み、離乳食を食べない問題に直面した際に寄り添えるような情報が必要である。リーフレットや支援内容の改善が必要な点のうち、何を優先するかについては今後調査を進めていくことで明らかにしていく予定である。

なお、本研究の内容は、第73回北海道公衆衛生学会で発表している。今後は、日本小児保健協会学会誌に論文投稿する予定である。

## 謝辞

調査にご協力くださった親御様、保健センター職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

## 参考文献

- 1) 「授乳・離乳の支援ガイド」改定に関する研究会(2019)授乳・離乳の支援ガイド(2019年改訂版). 厚生労働省.